

課題の本質に迫る実践的な探究を通じ 地域の未来を創る「変革者」を育む

ふたば未来学園高校 (福島・県立)

演劇を通じて課題のとらえ方を学び、グローバルな視点をもって地域の課題解決策を探る
3年間の探究学習プログラムは、開校3年目を迎えるふたば未来学園高校の大きな特色です。
活動を通じて困難を打ち破って歩いていこうとする生徒たちの姿から、教育の可能性の大きさがうかがえます。

取材・文／藤崎雅子

実践のKeyword

🔍 演劇 🔍 プロジェクト学習 🔍 グローバル教育 🔍 外部講師 🔍 NPO連携
🔍 ルーブリック 🔍 中高連携

復興の希望が込められた 未来を創る学校

福島県立ふたば未来学園高校は、2015年、「未来を創る学校」として開校した総合学科高校だ。同校が位置するのは、福島第一原子力発電所のある双葉郡の南端。東日本大震災時の原発事故によって多くの住民が避難を余儀なくされ、いまだ混乱が続くなか、復興に向けて一歩ずつ前進している地域だ。

かつて双葉郡8町村にあった5つの高校がすべて休校した現在、双葉地区教育長会らの「いかなる状況下でも子どもたちの学びを保障する」との強い意志によって生み出された同校は、郡内唯一の高校となった。郡内の中学校と連携し、さらに19年度には併設中学校の開校が予定されており、地域の子どもの未来を拓くという大きな役割を担っている。

同校生徒の4割強は双葉郡出身者だ。原発事故後の避難生活で転校を繰り返した生徒や、喪失感から力を発揮できず過ぎてきた生徒や、避難先でいじめにあい不登校になった生徒もいる。一方で、「地域の復興を担いたい」という意欲をもって入学する生徒は多い。

地域も生徒も乗り越えなくてはならない課題を抱える状況をふまえて、同校が目指すのは、自らを変革し、地域を変革し、社会を変革していく、「変革者」の育成だ(図1)。変革のための「自立」「協働」「創造」の3つの理念を柱に、「未来創造型教育」と銘打った新しい教育に取り

組んでいる。丹野純一校長はこう語る。

「これまでの価値観を根本から見直して、新しい生き方や社会の建設を目指す力を子どもたちにつけていくこと。それが福島の子どもの未来に繋がると強く感じます。今ある現実を少しずつ変えていくことで、未来を創造していったほしいという思いを込めて、変革者たれと呼びかけています」

探究と各教科の学びの往還で 汎用的な力を育成

開校直後、全教員で議論を行い、育成したい生徒像のイメージを共有した。そこで出た意見をもとに目指す資質・能力のルーブリックを作成(図2)。定期的に生徒自己評価を行って成長状況を確認している。

ルーブリックにあげられているのは、「他者との協働力」「寛容さ」「自分を変える力」など、実社会で活用できる汎用的な資質・能力だ。各教科の学習だけでは育成が難しいものもあるなか、カリキュラム全体での育成を図っている。

その核となるのが、1年次「産業社会と人間(産社)」と2・3年次「総合的な学習の時間(総学)」で展開する、「原子力災害からの復興」を主題とした探究学習のプログラムだ(図3)。地域をしっかり見つめるだけでなく、スーパーグローバルハイスクールとしての海外研修事業と絡めながら世界に視野を広げ、課題解決に向けた実践に取り組む。

一方、各教科の授業も表面的な知識・



School Data

2015年設立／総合学科
 生徒数419人(男子253人・女子166人)
 (本校舎)福島県双葉郡広野町大字下浅見川字築地12
 *一部の生徒は猪苗代校舎、三島長陵校舎で学んでいる
 TEL 0240-23-6825
 URL <http://www.futabamiraigakuen-h.fks.ed.jp/>

Outline

双葉地区教育長会などによって決定した「双葉郡教育復興ビジョン」の柱として2015年に開校。進学に対応したアカデミック系列、スポーツに特化したトップアスリート系列、農業・商業・工業・福祉を学ぶスペシャリスト系列の3系列からなる総合学科。平成27年度スーパーグローバルハイスクール、OECD地方創生イノベーションスクール2030参加校。2019年度から中学校併設型中高一貫校となる予定。

図2 ふたば未来学園の
人材育成要件・ルーブリックの項目

ダウンロード可



協働 創造
自立

学力概念	資質・能力・態度
知識	A. 社会的課題に関する知識・理解 一般常識や基礎学力をつけながら、世界・社会の状況の変化やその課題を理解するための知識を身につける。
	B. 英語活用力 英語を使ってのコミュニケーションができるようになる。
技能 (スキル・コンピテンシー)	C. 思考・創造力 物事を論理的に考え、批判的思考で掘り下げ、スケールの大きな考え方ができる。
	D. 表現・発信力 どのような場でも臆することなく自分の考えを発信でき、他者の共感を引き出せる。
	E. 他者との協働力 異文化・異なる感覚の人・異年齢等を乗り越え、仲間と協力・協働しながら互いに高めあえる行動が取れる。
	F. マネージメント力 自分や組織での取り組みを計画性をもって進めることができる。
人格 (キャラクター・センス)	G. 前向き・責任感・チャレンジ 自分を意味ある存在として考え自信を持ち、課題解決のために自分の役割を見つけ、全力で取り組み、決してあきらめず遂行できる。
	H. 寛容さ 異文化や考えの違う他者を受け入れ、思いやるあたたかさを持ち、協働して共に高めようとする事ができる。
	I. 能動的市民性 社会を支える当事者としての意識を持ち、地域や国内外の未来を真剣に考えることができる。
自らを振り返り変えていく力 (メタ認知)	J. 自分を変える力 自分の言動や行動を俯瞰して見つめ直し、常に改善しようとする意識を持ち、次の行動に繋げることができる。

図1 ふたば未来学園高校「未来創造型教育」の全体像

未来の「変革者」たち

＜ 教育目標 ＞

新しい生き方、新しい社会の建設を目指し、地域や世界を舞台にして、これまでの価値観、社会のあり方を根本から見直し、自らを変革し、地域を変革し、社会を変革していく「変革者」を育成する。

＜ 変革のための3つの理念と取り組み ＞

1. 自立

～自主・自律と、主体性の回復～

- 知識詰め込みから脱却し、自ら学ぶ力を育成する「主体的な学び」
- 解のない課題への挑戦を後押しする授業
- 学力向上・進路実現
- 生徒指導、教育相談体制の充実

2. 協働

～多様性の中での共生、協働～

- 多様な主体との連携・協働による「対話的な学び」
- 価値観や文化の違いを超えて共に生きる力の育成
- 国際、人権感覚を備えた市民の育成

3. 創造

～新たな価値、生き方、社会の創造～

- 各教科と探究の往還による、知識を生きて動くものとする「深い学び」
- 震災と原発事故から学び、教訓を生かした、新たな生き方の創造
- グローバル化や少子高齢化・人口減少が進行した社会、知識基盤社会における新たな地域、社会の創造
- イノベーションにつながる新たな価値の創造

同校資料より作成

技能の習得にとどまらない。各教員が対話や主体的な活動を授業に導入。現実社会の問題を数学で解析する授業、数学科・公民科合同による2030年の社会について考える授業、理科や工業科の協力を得た福祉科の体験的授業など、さまざまな工夫を行っている。

これら「産社」総学の探究学習と各教科の学びを意図的につなげることで、目指す資質・能力を育成しようというのが、同校カリキュラムのコンセプトだ。

「各教科で身につけた知識・技能や思考力などを探究学習の実践に活用する一方で、探究学習で生じた意欲や新たな疑問を各教科に返していく。こうした探究学習と教科学習の往還による相互作用によって各学習の内容を深め、効果的に資質・能力を育んでいく」と考えています(丹野校長)

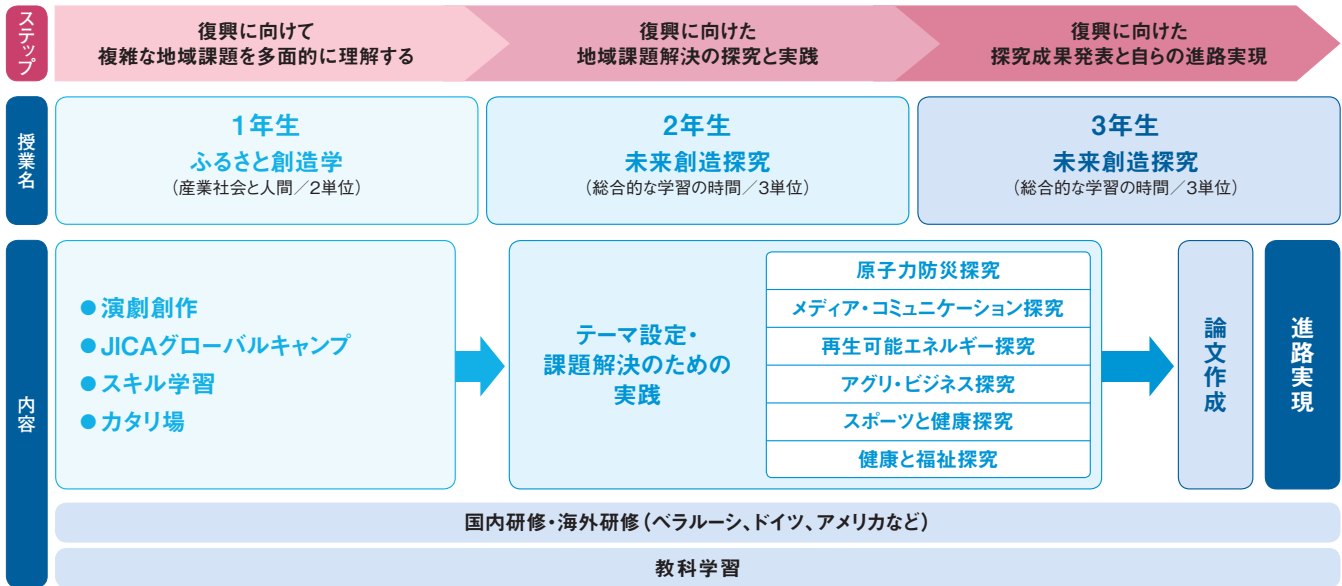
演劇を通じて 問題の本質に目を凝らす

では、同校の大きな特色である探究学習について、具体的にみていこう。

まず、1年次の「産社」では、「ふるさと創造学」という名で、復興に向けて複雑な地域課題を多面的に理解することを目標とした授業を行う。その中心的な活動が「演劇」だ。劇作家・演出家の平田オリザ氏を講師に迎え、数人ずつのグループで、地域でのフィールドワークをもとに復興に向けた課題を見つめる対話劇を制作し、自ら演じる。

地域には、原発事故による住民の離

図3 未来創造探究の流れ



学校資料より作成。単位数は2017年度入学生の場合

散、コミュニティの分断と対立、地域に対する偏見や風評、人口減少や少子高齢化の加速など二筋縄ではいかない多様な問題がある。そんな問題の複雑さを、異なる価値観や意見をもった人々の対話で構成する対話劇によって、ありのままに表現する。明確な「悪者」は作らない、安易な解決策は出さない、がルールだ。

例えば、ある班は、町役場職員と地域住民が、共通の友人を交えて立ち話する場面を劇にした。役場職員は予算の問題もあつて思うように復興を進められないことを悩むが、そんな現状にいらつく地域住民は不満をぶつける。

「異なる立場や考え方を理解するのはなかなか難しいことですが、演劇のセリフとして考えたり役になりきって演じたりすることで、その人の感情や考え方を疑似体験できます。また、対立する場面も仲間同士で演じることで、相手を理解しようとする感覚をつかみやすいようです」

（企画研究開発部主任・対馬俊晴先生）

劇では、対立したりわかり合おうとしたりのやりとりから、その背景にある困難さや苦悩とともに、問題の複雑さが浮

かびあがる。

「同じ地元住民のなかにも多様な立場や事情があつて、それによって問題の見方・考え方は違います。そうした複雑さにも目を凝らしていくことで、本当の問題が見えてくるものです。『演劇』を通じて物事の本質をつかむ入口に立つことができ、2年次からの課題解決に向けた動きにつながっていきます」（丹野校長）



海外研修
希望者を対象に、チェルノブイリ原発事故からの復興を学ぶベラルーシ研修、先進的な環境・エネルギー対策を学ぶドイツ研修、国連本部を訪問する米ニューヨーク研修などの海外研修を実施している。



演劇
異なる考えをもつ地域住民、東京からやってきた東京電力幹部、地元出身の東京電力社員などが登場する劇では、怒りを爆発させて相手につかみかかる場面も。



未来創造探究
原子力探究班の生徒がファーマーズマーケットを開催。授業外の時間でも使って1人で始めた活動だったが、賛同の輪が広がり、他学年も含む十数人が協力した。

各自がテーマをもって課題解決に向けて活動

2・3年次「総学」の授業「未来創造探究」では、各自がテーマをもって復興に向けた地域課題の解決に取り組んでいく。原子力災害によって失われた地域コミュニティの再構築を考える「原子力防災探究」や、福島復興につながる今後の農業とビジネスを考える「アグリ・ビジネス探究」など6つの探究班があり、クラスを超えて編成される。活動内容は班ごとに異なるが、全生徒に配布する同校オリジナルのテキスト「未来創造探究ノート」に沿って進めていく。

その大まかな流れはこうだ。2年次の

前半、各探究班の分野について班全体で学びながら、グループあるいは個人で個別テーマを設定。それぞれが情報収集、実践、まとめ、発表、振り返りという探究活動を繰り返し、スパイラル状に発展させていく。その際、机上の研究に終わらず、地域での実践を求めているのが特徴だ。そして、3年次では各自が論文としてまとめ、自治体や関係省庁などに向けて探究成果を発信する。

例えば、ある生徒は、地域住民と作業員に分断されたコミュニティの再構築につながることを目指し、交流の場となる「ファーマーズマーケット」を企画。耕作放棄地を借りて自ら育てた野菜を使って商品開発し、また地域の農家や企業にも声をかけ、実際にファーマーズマーケットを開催し、多くの人を集めた。そうした実践を通じて「安全」と「安心」の違いについて考察を深め、地域に対する提言を行った。



未来創造探究ノート
探究を深めていくための手がかりとして、探究の流れや各ステップのポイント、ワークシートなどが盛り込まれている。リングバインダーに綴じて活用し、探究班独自ワークシートや活動記録などを挟み込んでいく。

外部連携で学びを深め自分の進路や生き方に繋げる

探究学習にはほぼすべての教員が関



企画研究開発部主任
対馬俊晴先生



副校長
南郷市兵先生



校長
丹野純一先生

「総学」の各探究班では担当教員たちが異なる専門性を生かして多様な視点で生徒の探究活動を支援している。さらに、今年度から認定NPO法人カタリバとの協働で授業を行うようになり、より多面的な活動支援が可能となった。しかし、課題へのアプローチには高い専門性が必要な場合も多く、校内だけで対応するのが困難な場合も多い。そこで、大学教授や企業、地域住民など、外部人材の力も借りながら学んでいく。「産社」「総学」の時間帯は、多くの人が来校し、講義を行ったり、生徒と議論したりする。あるいは生徒がどんどん地域に出掛けて学んでくる。

「正解のない課題に対し、教員も手探りで進むしかありません。教員も探究しようという気持ちで、生徒と一緒に学んでいきます」(対馬先生)

図4 未来創造探究のチェックポイント

プレ発表会(2年次11月)に向けて

- 地域が抱える課題をおさえているか?
- 自分が取り組みたい課題設定が決まっているか?
- 課題解決に向けた調査や実践の報告があるか?
- 新たに見えてきた課題の報告があるか?

中間発表会(2年次3月)に向けて

- 全国や世界の課題と照らし合わせた考察があるか?
- 課題解決に向けた調査や実践の報告があるか?
- 新たに見えてきた課題の報告があるか?

発表会(3年次9月)に向けて

- 全国や世界の課題と照らし合わせた考察があるか?
- 課題解決に向けた調査や実践の報告があるか?
- 社会や未来に向けた提言があるか?
- 学んできた内容を自分の進路や生き方に繋げているか?

ただし、同校が目指しているのは単にすばらしい研究発表をするのではないことを、南郷市兵副校長は強調する。

「大学生の研究ではなく、高校生の探究ならではの学びとして重視している点があります。それは、学んできた内容を、自分の進路や生き方、実社会への向き合い方にしっかり繋げることです」

2年間の「総学」で3回ある発表会の前には共通のチェックポイントで振り返りを行い、探究を深める手がかりとしているが、そこには「自分が取り組みたい課題設定が決まっているか」「自分の進路や生き方に繋げているか」といった、自身自身を見つめる項目も設定(図4)。これに沿い、教員も進路との接続を意識して指導を行う。また、3年次で論文作成に入る前には、これまでの自分を踏まえて世界の課題にどう向き合っていくかという短いエッセイを書く。そうして、節目ごとに学校での学びと自分の未来との接続を図っている。

「方向性は間違いでなかった」 生徒の成長が証明

3年間のさまざまな学びのなかで、大きく成長する生徒は多い。海外研修をきっかけに飛躍する生徒、さまざまな経験の積み重ねで少しずつ意識が変わる生徒など、状況は人それぞれだが、丹野校長が特に手ごたえを感じているのはこんな全体傾向だという。

「本校には、数々の苦労や喪失の経験から復興への思いが強い生徒が多く入学し

ます。最初から具体的な夢のある生徒もいますが、漠然とした思いだけで気負っている生徒も少なくありません。それが3年間の学びのなかで自分のやりたいことが明確になり、復興のために自分があるのではなく、自分の夢を実現するフィールドとしてふるさとがあるというふうに変わってきた。生徒の未来を考えるととても嬉しいですね」(丹野校長)

この春、同校初の卒業生となる1期生は、探究学習で取り組んだテーマを引き続き学んでいくために大学進学したり、系列で学んだ専門性を生かして就職したり、それぞれが選んだ道を進んでいく。

同校の教育は、どこかにある前例に倣うものではない。新しい挑戦に対する教員の不安は大きく、これで本当にいいのかと悩みながらここまでできたという。だからこそ教員も必死に学んできた。月1回程度、授業方法やキャリア教育などをテーマに、大学教授や専門家を講師に招い

て「未来研究会」という教員研修を実施。校内で自主的な勉強会を開いたり、講演会や講習会などに出掛けて学んでくる教員も多い。

そして今、育った生徒たちを見て、「我々の方向は間違いでなかったんだと、ようやく確信がもてるようになった」と丹野校長。その一方で「まだまだ不十分」と気を引き締める。「変革者」の育成に向けて、さらなる教育の質の向上を図っていく方針だという。

「方向性は間違っていない。次はそれをどれだけ深めていけるかです。今後は、探究課題の本質に迫る深い学びの「一層」の追求や、対立を乗り越え共存を図る市民性やコミュニケーション能力の育成に力を入れていきたい。それによって未熟なりに物事の本質をとらえ、大人たちが本質から外れた動きがあれば鋭く切り込んでいく。そんな生徒を育てていけたらと考えています」(丹野校長)

Interview

原発に頼らない 省エネ社会を実現させたい

東日本大震災が発生したのは小学校5年生の時です。避難生活の経験や周囲の状況から「地域の復興に携わりたい」と思い、ふたば未来学園高校に入学しました。



アカデミック系列3年次
遠藤健次くん

とはいえ、初めは何をしてよいかわかりませんでした。それが一気に具体化したのは、環境大国と言われるドイツでの研修で、少ないエネルギーで快適に過ごせるパッシブハウスについて学んでからです。日本でもこういう住まいを取り入れることで、原発に頼らない社会に近づけるのではないかと考え、未来創造探究のテーマに設定しました。ソーラーパネルを製作して屋根の角度と発電量の関係を調べたり、3Dプリンターで建物の模型を作って断熱効果の実験をしたりして、省エネ方法の検討に取り組んできました。

卒業後は福島大学共生システム理工学類へ進学予定です。引き続きさまざまな視点からエネルギーについて学んで、さらに新しいアイデアを生み出し、英語コミュニケーション能力も磨いて世界に発信していけたらと思っています。